

# 多元主義者によるメルティングポット論批判 メルティングポット論の系譜（２）

村井 忠政

## はじめに

われわれは前稿でメルティングポット論の系譜をその起源にまで溯る作業をおこなった。ここでは、まずその理論的系譜をクレヴクルの『アメリカ農夫の手紙』、ターナーの「フロンティア理論」、ザングウィルの戯曲『メルティングポット』まで溯り、アメリカ社会をメルティングポットに喩えるこの隠喩（メタファー）が幅広い層に受け入れられていった経緯とその原因を当時のアメリカのエスニック状況を背景に分析した。その結果、シンボルとしては圧倒的なインパクトと強力なイメージ喚起力を持つメルティングポット論ではあるが、他面において社会学的同化理論としては多くの誤解や攻撃を招く曖昧さを内包していることが明らかになった。

1

本稿では、ホレス・カレンとランドルフ・ボーンという 20 世紀初期の多元主義者を取り上げ、彼らによるメルティングポット論批判を検討する。第 1 に、文化的多元主義思想が生まれるに至った当時の社会的背景を知るために、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて南欧・東欧からの怒涛のようにアメリカへ押し寄せた移民の波が、アングロサクソン系を中心とする旧移民の眼にどのような脅威として映ったかを、具体的な統計を挙げて考察する。第 2 に、現代アメリカにおける多文化主義の先駆的思想家として知られるユダヤ系知識人ホレス・カレンをとりあげ、彼がメルティングポット論をはじめとする同化主義を批判するなかで、移民のアメリカ社会への同化に関して文化的多元主義と呼ばれる独自の見解を抱くに至った思想的背景を解明する。第 3 に、カレンの文化的多元主義に触発されたランドルフ・ボーンのメルティングポット論批判を取り上げ、彼の「トランスナショナル・アメリカ」なる構想を検討する。最後に、これらの初期の多元主義が抱えていた問題点と限界について論じる。

## 1. 文化的多元主義が生まれた社会的背景

### （１）新移民の到来

1910 年代に入ると、移民にアメリカ社会への同化を迫る同化主義的パラダイムに対し、文化的多元主義の立場から根元的な反論が提示される。反論の 1 つはメルティングポット論そのものに対する批判であり、もう 1 つは、メルティングポットの中身に対する批判である。両者の違いは微妙だが、前者はアメリカニズムと呼ばれる 100 パーセントの同化主義への批判、後者はアングロ・コンフォーミティへの批判という形をとって展開された。

ここで文化的多元主義が生まれるに至った社会的背景について述べておこう。社会学者のミルトン・ゴードンによれば、文化的多元主義は理論となる前から 少なくとも、それが明らかに国民社会全体にゆきわたり、英語を話すアメリカの知識人社会において明確に議論される理論になる前から アメリカ社会における事実であったという。<sup>2</sup>

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、南欧や東欧からの移民の到来が始まる。イタリア人、ユダヤ人、スラブ人などが大挙して移住するようになったのである。アメリカの海岸に大挙し

て押し寄せた移民たち これらの移民は北欧・西欧出身の旧移民との対比で「新移民」と呼ばれた<sup>9</sup> を迎え撃ったのは、ネイティブ・ストックと呼ばれるアメリカ生まれの白人を優先する排外主義（ネイティヴィズム）の新たな潮流だった。<sup>4</sup> 文化的多元主義という新しい教義が生まれたのは、アメリカニゼーションの名で知られるこの運動がこれら新移民らに息つく間もなく数々の同化要求を突きつけたことの反動であると言われている。この教義は、アメリカニゼーションやアングロ・コンフォーミティ論の立場から提示された仮説や要求に反抗すると共に、その過程で、メルティングポット論の信奉者らが掲げたより穏健で好意的な青写真をも拒絶するものだった。<sup>5</sup>

アメリカ社会は合衆国憲法が制定されるはるか以前から多民族・多文化社会であったし、また多言語社会でもあった。<sup>6</sup>これを国のまとまりを乱すものとして危惧する傾向も今に始まったことではない。すでに 1751 年、ベンジャミン・フランクリンは、怒涛のごとくペンシルヴァニアに押し寄せてきたドイツ系移民の群れに業を煮やしている。<sup>7</sup> 19 世紀を通して、何百万人ものヨーロッパ人やアジア人が、より良い生活へのチャンスを求めてアメリカに押し寄せた。そして、「先輩」アメリカ人たちは、ベンジャミン・フランクリンのかつての嘆きを彷彿させるように、アメリカがあまりにも多様化し、以前と変わってしまうことへの恐れを募らせていった。

南北戦争の前でさえ、新たに到着した移民が「旧アメリカ」に与える影響を憂慮するグループが、ノー・ナッシング党を結成して、移民に政治家への道を閉ざすことや、市民権の取得に要する期間を 5 年から 20 年に延長することなどを主張した。<sup>8</sup> 当時移民は貴重な労働力であり、彼らに対して門戸を閉ざすことは誰も考えなかった。しかし 19 世紀末になるとまずアジア人を対象に移民の規制がなされ、やがてヨーロッパ人にも拡大された。移住者数の制限と平行して、学校や職場で移民を「アメリカ人」化する、すなわち言語や外見や文化の違いを無くするという動き（アメリカニゼーション）が起こった。ウッドロー・ウィルソンとセオドア・ローズベルトの両大統領は多くの点で異なっていたが、「～系アメリカ人」（いわゆる「ハイフン付きアメリカ人」<sup>9</sup>）が嫌いなことでは一致していた。

## （2）新移民の大量到来の衝撃

アメリカの移民史において移民数が頂点に達するのは第 1 次大戦直前の 1913 年の 198 万人で、その前後の 1906 年から 1915 年までの 10 年間におよそ 1000 万人がアメリカに押し寄せてきた。つまりこの間毎年平均 100 万人の移民をアメリカは受け入れていたことになる。これらの移民の大半はミシシッピ川の東側、オハイオ川とポトマック川の北側の地域にある鉱工業の中心地に集中して住み着いた。しかし、これらの移民のうちかなりの数が極西部にも広がり、さらには 1910 年までには、南部ですら 20 万人の移民をかかえるにいたった。<sup>10</sup>

移民が受け入れ国に与える衝撃を示す指標としては、その絶対数よりも、それを受け入れる国の人口数に対する割合を重視すべきであろう。このため各 5 年間の移民数をその最終年の人口数の百分比で示したのが表 1 の C 欄である。これらの統計からだけでも、1850 年前半の移民排斥運動、ノー・ナッシング党の台頭、1882 年の最初の移民排斥立法、第 1 次大戦直前の 10 年間の移民制限運動などの時代背景を説明する一つの目安になるだろう。

新移民がアメリカ社会に適応しにくいと思われたのは、彼らの多くが中欧、東欧、南欧からの移民であったという民族的な出自にあったことは言うまでもないが、宗教的にみても彼らの宗教がギリシャ正教、ローマ・カトリック、ユダヤ教などといった、北欧や西欧のプロテスタント的文化になじみにくいものであったことも原因している。1880 年代から急増の兆しを見せていたドイツ以外の中欧、東欧、南欧からの新移民は、1896 年にはついに北欧、西欧からの移民を上回った。<sup>11</sup> これらの新移民は、従来の旧移民とは違い、言語、宗教、生活習慣等の面で

アングロサクソン系アメリカ人との差異が大きいため、アメリカ社会への適応能力に欠けているように思われた。「西ヨーロッパの規準に従えば、南欧・東欧系移民の大群は、まともに教育を受けていず、社会的に後進的であり、その外貌は異様であった」。<sup>12</sup>そればかりか、ポーランド系がカトリックの、ロシアが東方正教会の組織を設立したことなどに見られるように、新移民が自民族で固まって文化を保持することにこだわったことは、国内の反移民感情を喚起せずにはおかなかった。西部開拓は 1880 年代にはほぼ限界に達しつつあり、多くの新移民は都市に留まったが、彼らは都市化とともに発達した集票組織としてのマシーンに取り込まれて利用され、「旧移民」にとっては政治的にも無視できない存在となっていく。さらに、表 2 に見られるように彼ら新移民の非識字率が北欧系や西欧系の移民のそれにくらべて格段に高かったことも彼らに対する差別意識を生む一因となったことは間違いないところであろう。

表 1 アメリカ合衆国総人口に占める移民の割合 (1821 年 - 1955 年)

A		B		C
西 暦	移民人口 (単位1000人)	西 暦	総人口 (単位1000人)	C = A/B × 100 (%)
1951 - 1955	1,088	1955	165,270	0.66
1946 - 1950	864	1950	151,683	0.57
1941 - 1945	171	1945	139,928	0.12
1936 - 1940	308	1940	132,122	0.23
1931 - 1935	220	1935	127,362	0.17
1926 - 1930	1,468	1930	123,188	1.19
1921 - 1925	2,639	1925	115,832	2.28
1916 - 1920	1,276	1920	106,466	1.20
1911 - 1915	4,460	1915	100,549	4.44
1906 - 1910	4,962	1910	92,407	5.37
1901 - 1905	3,833	1905	83,820	4.57
1896 - 1900	1,564	1900	76,094	2.05
1891 - 1895	2,124	1895	69,580	3.05
1886 - 1890	2,271	1890	63,056	3.60
1881 - 1885	2,976	1885	56,658	5.25
1876 - 1880	1,085	1880	50,252	2.16
1871 - 1875	1,727	1875	45,073	3.83
1866 - 1870	1,513	1870	39,905	3.79
1861 - 1865	802	1865	35,701	2.25
1856 - 1860	850	1860	31,513	2.70
1851 - 1855	1,748	1855	27,386	6.38
1846 - 1850	1,283	1850	23,261	5.52
1841 - 1845	430	1845	20,182	2.13
1836 - 1840	347	1840	17,120	2.02
1831 - 1835	252	1835	15,003	1.68
1826 - 1830	103	1830	12,901	0.80
1821 - 1825	41	1825	11,252	0.36

出典：A. *Historical Statistics of the United States: Colonial Times to 1957*, pp.56-57.

B. *Ibid.*, p.7

表 2 移民の非識字率 (1889 年 - 1910 年)

ポルトガル	68.2%	中国	7.0%
トルコ	59.5%	フランス	6.3%

メキシコ人	57.2%	ドイツ	52%
南イタリア	53.9%	オランダ、ベルギー	4.4%
小ロシア	53.4%	キューバ以外の西インド	3.2%
シリア	53.3%	アイルランド	2.6%
リトアニア	48.9%	ウェールズ	1.9%
インド	47.2%	ボヘミア、モラヴィア	1.7%
ブルガリア、モンテネグロ、セルヴィア	41.7%	フィンランド	1.3%
ダルマチア、ボスニア、ヘルツェゴビナ	41.0%	イングランド	1.0%
ユダヤ	26.0%	スコットランド	0.7%
日本	24.6%	スカンディナヴィア	0.4%
北イタリア	11.5%		

出典：Statistical Review of Immigration, 1820-1910 (Reports of The Immigration Commission), p.84 より抜粋

移民選別の方策として識字テスト(Literacy Test)の導入が提案されたのは、1890年代初頭のことである。この法案は、議会では数度にわたって可決されたものの、クリーヴランド、タフトなどの歴代大統領に拒否されて、いずれも不成立に終わる。ウィルソン大統領の2度におよぶ拒否を乗り越えてそれがようやく成立したのは1917年のことであり、これによって、16歳以上の移民(ただしその妻、母親、祖母、寡婦ないし未婚の娘は免除される)には簡潔な文章(ただし英語に限定されない)の読解能力が入国要件として科されることになった。しかしながらこの法律の施行後も移民数が大きく減少することはなかったことからわかるように、識字テストは実質的な効果を伴わなかった。<sup>13</sup>

1860年代から1910年代にかけて、アメリカへの移民流入は激増しているものの、この間に総人口も増大しているため、外国生まれ人口比率は実はほとんど変化しておらず、増大しているのは移民二世である外国系のアメリカ人である。<sup>14</sup>したがって、この時期からの移民問題は、単なる外国人受け入れの議論を超えて、非アングロサクソンの存在をアメリカ社会がどう受容するかという問題へと深化したと言ってよい。

経済活動における脅威や異文化への嫌悪に由来する、旧移民系アメリカ人たちの反外国人感情(xenophobia)は、科学を装った人種差別思想が学界において隆盛をきわめたことによって、学術的に正当化されていく。19世紀後半にダーウィンによって発表された進化論は、資本主義による経済成長を背景に、社会にも適用可能な理論とみなされるようになった。20世紀になると、エドワード・A・ロス(Edward A. Ross)<sup>15</sup>に代表される社会学者や人類学者たちが、アングロサクソンの優位性を説く著作を次々と発表し、移民制限の正当性を強く主張しはじめたのである。

### (3) 移民制限への動き

1910年代以後の内外の事情は、アメリカの国家としての性格の再確認を促した。ホレス・カレン(Horace Kallen)が文化的多元主義(cultural pluralism)の原型と言える思想を発表したのは1915年であり、<sup>16</sup>新しいアメリカ像も次々と論壇に上り始めていたが、アングロ・コンフォーミティの思想は依然として強かった。「100%アメリカニズム」の提唱者たちは、移民たちが祖国との精神的な絆を断ち切ってアメリカのみに忠誠を誓うことを要求し、クー・クラックス・クラン(KKK)のような白人至上主義者たちは、外国人に対する迫害の姿勢を強めた。アメリカにとって望ましい人口構成を積極的に創出するため、政府は移民政策の抜本的見直しを迫られることになった。

そのような状況での第1次世界大戦への参戦は、アメリカ人としての忠誠が試される好機であり、多民族が一国民として統合されることが期待される一方で、敵性外国人は厳しい視線を

受けざるを得なかった。旧移民の中でも大きな割合を占め順調にアメリカに同化してきたドイツ系も、第1次世界大戦参戦に伴い厳しい立場に置かれた。また、ロシア革命の勃発とそれに続く国際的共産主義組織コミンテルンの創設は、自由主義的価値観に基づいて多民族の統合を図ろうとするアメリカの理想を脅威にさらすものであり、1919年に起こった一連の反共産主義の動きは、排外主義と結びついて敵性外国人の摘発を誘引した。クーリッジ大統領が移民について、良き市民であるべきことを説いて「アメリカはアメリカ的であり続けなければならない」<sup>17</sup> と一般教書で述べたように、あらゆる非アメリカ的な存在に対していかに対処するかが、アメリカの重要な課題であった。

経済的には、1920年に不況がアメリカを襲い、もはや産業界が労働力不足を強く主張することはなくなった。しかし、ヨーロッパ経済の戦後の混乱状態はアメリカへの移民流入を危惧させるのに十分であり、アメリカ労働総同盟(AFL)等の労働者団体は、さらに強力な移民制限を要求した。政治的には、国際連盟への加入を議会が否決したことに象徴されるように、ウィルソンの国際主義の理想は明らかに下火となり、「平常への復帰」を主張したハーディング大統領のもと、伝統的な孤立主義が復活しており、移民制限への賛同は政党を超えて共通の姿勢であった。

このような情勢を背景に、緊急移民割当法(ジョンソン法)が制定されたのは、1921年のことである。この法律は国別に移民数を割り当てるもので、各国の出身者の1910年時点の国勢調査に基づいて算出された合衆国における人口の3%が、移民数の上限として定められた。出身国を理由とするアメリカへの移民制限がヨーロッパ人に適用されたのはこれが最初であり、反面、カナダをはじめアメリカ大陸からの移民は依然として無制限であった。<sup>18</sup>この法律では南欧、東欧が過剰に有利になるとの批判を受け、また熟練労働者の比率を高める意図もあって、1924年の移民法(ジョンソン=リード法)では、各国への割当が、1890年時点での各国の出身者の人口の2%と変更された。<sup>19</sup>

## 2. ホレス・カレンの文化的多元主義

### (1) ホレス・カレンの思想形成

メルティングポット論やアングロ・コンフォーミティ論に代表される同化主義への批判の先駆者として知られるホレス・カレンは、1915年の『ネイション』誌に「民主主義対メルティングポット」と題する論文を2回にわたって発表している。<sup>20</sup>カレンは長命で1974年まで生きたが、仕事の面で言えば、「民主主義対メルティング・ポット」がその最も重要な著作である。「メルティングポットで完全に溶けてしまわないとアメリカ人にはなれないのか」というのが、この論文で彼が立てた命題であった。この論文のなかで、カレンは「アメリカニゼーション」「アングロ・コンフォーミティ」「メルティングポット」などの同化主義的理論が、アメリカで実際に起こっていることを表わすモデルとしても、望ましい将来像としても役に立つものではないと強く否定している。

ここでホレス・カレンの生涯について概説しよう。ホレス・M・カレンは、1882年にドイツのシュレージェンのベレンシュタットで正統派ユダヤ教のラビの息子として生まれ、5歳の時、家族とともにアメリカのボストンに渡っている。<sup>21</sup>彼の思い出によれば、ボストンでユダヤ教の注釈付きの旧約聖書と正統派ユダヤ教徒の気難しく自己犠牲的な家庭で育てられた。そこで初等・中等教育を受け、1900年にハーヴァード大学に入学、3年後に優秀な成績で卒業している。彼はハーヴァード時代に3人の教授、すなわちバレット・ウエンデル、ウィリアム・ジェイムズ、ジョージ・サンタヤナから大きな影響を受けているが、そのなかでもアメリカ屈指の偉大なプラグマティストであるジェイムズの「多元的宇宙」(pluralistic universe)の観念から

文化的多元主義の着想を得たと思われる。<sup>22</sup>

ユダヤ系の血を引く若き日の理想主義的青年カレンは、シオニストであると同時にアメリカ・ナショナリストでもあった。その当然の帰結としてカレンは、自らのユダヤ人としての忠誠心とアメリカ人としてのそれとの間の深刻な内的葛藤に悩まされていた。この点では、カレンと同じくユダヤ系知識人であり、シオニストでもあった戯曲『メルティングポット』の著者イズリアル・ザングウィルとは、同化に関して全く対照的な立場を表明している。すなわちザングウィルはその戯曲のなかでアメリカを偉大な「神のメルティングポット」に喩え、その中ではユダヤ人を含むあらゆるヨーロッパ人種が融合しアメリカ人として再生すると述べ、同化のもたらす栄光を華々しく戯曲『メルティングポット』によって象徴し圧倒的人気を博した。<sup>23</sup> 他方、カレンはユダヤ人としての自らの民族的出自にあくまでもこだわり、人びとはその祖父を変えることができないように、エスニシティを生涯変えることはできないと主張したのである。次の一節は彼の思想の核心を端的に表しているためしばしば引用される。「人びとはその衣服、政治、妻、宗教、哲学などを程度の違いはあれ変えることができる。しかしながら、彼らはその祖父を変えることはできない。」<sup>24</sup> この文中の「妻」を変えることはできても「祖父」を変えることはできないという言説は、カレンのユダヤ教徒としての面目躍如たるものがある。すなわち彼は、エスニシティを決定付けるのはあくまで男性であり、女性にはそのような地位を認めていないことをここから窺うことができる。<sup>25</sup>

ハイアムによれば、このように自らのエスニック・アイデンティティをめぐる葛藤に悩まされていたカレンは、アメリカ文学をめぐるウェンデルの講義を聴講することによって、その後の彼の思想に決定的な影響を与える知的経験をする。

ニューイングランドの貴族的文化のまさに化身ともいべきウェンデルは、保守的な同化主義者であった。というのは、彼にとって英国風より具体的にはピューリタンのな資質こそが、アメリカ的性格を構成するものにほかならなかったからである。とはいえ、ウェンデルが強調するところによれば、そのピューリタンたちは、ひるがえって旧約聖書の予言者たちに自らをなぞらえていた。アメリカは、もう一つのイスラエルとして始まったのであった。ウェンデルはさらに、初期アメリカのピューリタンの大部分はユダヤ人の血をひいているという興味深い説をすら弄んだ。カレンはそれまで自分はヘブライ的な過去から脱却できたと考えていた。ところが、ことここにいたって、彼が今までそこから逃げ回っていたものが突然、彼が追い求めていたものの中核に据えられることとなったのであった。ウェンデルの講義の刺激によって、カレンは改めてユダヤ人文化、そしてさらにシオニズムの研究にとりかかった。そしてその結果は、ユダヤ人は改宗しなくともアメリカの中心に属することが可能なことを示唆したのである。<sup>26</sup>

カレンがウェンデルから受けた知的影響については、カレン自身が1924年の著書『合衆国における文化と民主主義』の次のような献辞にも明確に現れている。「私はバレット・ウェンデルの思い出にうやうやしく本書を献呈する。詩人、教師、知識人であり、アメリカとアメリカ精神に深い洞察を持った解釈者たる彼の教えの中に、私ははじめてその流れと意味を展望することができたのである。」<sup>27</sup>

ハーヴァード大学時代のカレンの思想形成に決定的な影響を与えたもうひとりの教師は、アメリカのプラグマティズムを代表する哲学者ウィリアム・ジェイムズである。カレンは学部学生時代から大学院で博士号を取得するまでこの偉大な哲学者の下で学んでいる。ジェイムズの哲学を社会学の言葉にうつしかえることによって、カレンは自分自身のユダヤ的自我とアメリカ的自我との間に新たに見出した関係を、一般的な議論の俎上にのせた。

カレンにとってとりわけ衝撃的であったのは、ジェームズがアメリカという存在にこめられた隠喩をきわめて効果的に用いていたことである。アメリカの政治制度に本来的に備わっている多元主義に共鳴しながら、ジェームズは多元的な宇宙を「帝国や王国としてよりは連邦的共和国に類似するもの」として描いていた。<sup>28</sup>これと同じイメージを、エスニック集団の集合としてのアメリカの統合体にもあてはめることができないだろうか。そのような統合体においては、カレンが彼自身の特異な出自と経歴を経て見出したように、各人が他に解消できない固有性をもちながらたがいに市民として連帯できるはずであった。<sup>29</sup>

カレンはハーヴァード大学卒業後、プリンストン、オックスフォード、ソルボンヌで学び、その後中西部のウィスコンシン大学で7年間教鞭を執り、続いてニューヨークで大学の教師、社会批評家として活躍した。彼の晩年の功績として特記すべきは、ニューヨークに新たに設立された大学(New School for Social Research)の発足に当たり大きな役割を果たしたことである。<sup>30</sup>

## (2) カレンの「民族連邦国家」構想

家族や祖先から継承する先天的に備わった根源的な部分と、市民権や職業など後天的に取得する部分の2つから人間の属性は成り立っているとカレンは考えた。彼によれば、人間の本性が多次元的な存在である限り、アメリカというメルティングポットに入ったからと言って、誰もが均質なアメリカ人に溶けてしまえるものではない。「アイルランド人はいつもアイルランド人であり、ユダヤ人はいつもユダヤ人である。市民や法律家やある教会のメンバーであるとかいうことが後天的属性であるのにたいし、アイルランド人であったりユダヤ人であったりするとは生まれつきの属性なのである。」<sup>31</sup>

彼が注目したのは、アメリカにおけるさまざまなエスニック集団が特定の地域に固まって根を下ろし、それぞれの言語、宗教、コミュニティの制度、先祖伝来の文化を維持しようとする傾向があることである。なかでも本人の血縁に根差す民族的特性は溶解不能な最重要な属性であり、それを家族や教会などの私的領域で保持しつつ、公的領域(政治社会や経済的生活)での共生を図ることをカレンは提唱したのである。「アメリカ合衆国は、単に地理的・行政的統一体としてだけでなく、多様な文化の共同体としての、また各民族の文化の連邦体(federation)あるいは連合体(commonwealth)としての、連邦国家へのプロセスを歩みつつある」<sup>32</sup>とカレンは述べているが、後に「文化的多元主義」(cultural pluralism)とカレン自らと呼んだこの考え方は、一言でいえば、民族連邦の構想に近かったといえる。

それではカレンが構想した連邦国家とはどのようなものであったのか。これについてカレンはその論文の結論部分で次のように述べている。

その形態は連邦共和国であり、その実質は、さまざまな国籍をもつ人々が、自分たちのやり方で人間性の完成を目指すという自己実現の事業において、共通の制度を通じて自主的かつ自発的に協力し合うという多国籍の民主主義である。この国の共通語であり偉大な伝統をもつ言語は英語だが、各集団は情緒的な部分や非公式な生活では、個性的かつ必然的に美的で知的な独自の方言や話し言葉を使うのである。国の政治的・経済的生活は単一の統一体とし、この国を構成している個々の民族が、それぞれの個性を実現しつつ、全体としてみれば調和したものとなるための基盤や背景として機能する。かくして、「アメリカ文明」とは「ヨーロッパ文明」からその荒廃した部分、卑小な部分、忌むべき部分を取り除いた協調のあり方の実現、すなわち統一の下での多様性、人類のオーケストラとなるのである。<sup>33</sup>

自分の思想をカレンが説明するのに用いた比喻が、メルティングポットでもサラダボウルでもモザイクでもなく、オーケストラであったのはきわめて興味深い。すなわち、例えばフルートはあくまでフルート、ヴァイオリンはあくまでヴァイオリンであり続けながら、楽団全体では美しく陰影に富んだ調和音を奏でるのがオーケストラであり、そのオーケストラに合衆国社会を、楽器の一つ一つに移民集団をカレンは喩えたのである。つまり、フルートがヴァイオリンのパートを奏で、その反対にヴァイオリンがフルートのパートを奏でるということは絶対にありえないのである。<sup>34</sup>

### 3 「トランスナショナル・アメリカ」 「忘れられた予言者」ランドルフ・ボーン

1910年代の合衆国でアメリカへの同化主義に疑義を呈したもう一人の社会思想家にランドルフ・ボーンがいる。カレンの議論と同じく、従来のメルティングポット論がいかに硬直したアメリカ文明論であるかという逆説からボーンの議論は始まる。けれども、以下の論述の中で明らかになるように、両者の思い描くアメリカ社会の多元性には大きな違いが認められた。

合衆国に定着した様々の民族集団がそれぞれ固有の属性を維持し続けることがアングロ・コンフォーミティの打開、あるいはその相対化に繋がるとカレンは説いた。したがって、彼の理解では民族の属性そのものは最後まで溶解することはなく、ただ合衆国で正当と見なされるべき属性がアングロサクソンのそれだけではないことを彼は強調したのである。これとは対照的に、ボーンは人間の本性を不断に創造を繰り返す流動的なものにとらえる。「われわれは皆等しく教育すると同時に教育されるべき存在である。アメリカにいる諸民族は共通の企てにたずさわっている。われわれの関心は、現在のわれわれにあるのではなく、この可塑性に富んだ次世代の人々が新しいコスモポリタニズムの理想の中でどのような変化を遂げるかにある」。<sup>35</sup>

ランドルフ・ボーンは、1886年、ニュージャージー州の静かな田舎町ブルームフィールドで生まれている。母方の家系はニューイングランドの最初の入植者を祖先に持つ名家であった。このように恵まれた家に生まれたボーンであったが、ある時大きな不幸が彼を訪れる。彼が4歳の時脊髄を結核菌に冒され、その後遺症で背中がせむしのように曲がり、成長が止まってしまう。<sup>36</sup> このような身体的奇形と出産時に顔の半面に受けた傷のせいで、彼の容姿は異様なものとなったが、彼はその身体的ハンディキャップにもかかわらずスポーツ好きで活動的な青年であった。長老派のクリスチアンの家庭に育ったランドルフであったが、多感な青年期にはヘンリー・ジョージやディッキンソンの著書を通じて社会主義思想の影響を受けた。<sup>37</sup>

1909年に彼はコロンビア大学に入学したが、学生時代の彼の愛読書はウィリアム・ジェイムズ、ニーチェ、ベルグソンであった。彼は自らの役割を同時代に対する急進的な批判者として、また新たな文化の形成者として考えるようになったが、それは明らかにニーチェの思想からの影響によるものであった。<sup>38</sup> 当時のコロンビア大学にはプラグマティズム哲学者のジョン・デューイやフランツ・ボアスといった錚々たる碩学が教壇に立っていたが、彼がもっとも強い思想的感化を受けた教授は、チャールズ・ピアードであった。ピアードの政治思想に感化されたボーンは、第1次大戦への合衆国の参戦を痛烈に批判する論陣を張った。とりわけ彼の鋭い批判の矛先は、大勢順応的に参戦論に傾いていったリベラルと目されていた知識人たちに向けられた。かつての大学での恩師デューイもその例外ではなかった。<sup>39</sup> ボーンは、1918年、当時アメリカで猛威を振った流感でわずか32年の短い生涯を閉じている。しかし、1916年7月に『アトランティック・マンスリー』誌に掲載された彼の論説「トランスナショナル・アメリカ」は、アメリカ文明の多元性を論じた古典として評価が高い。この論説の冒頭でボーンは、ヨー



ロッパで大戦が勃発し、その影響を被ったアメリカ国内で様々な集団のナショナリズム活動が展開されるようになったという事実から、メルティングポットのなかで移民を融合させようとする試みは失敗に終わったと結論する。<sup>40</sup> ボーンはその論稿「トランスナショナル・アメリカ」の中で十数回メルティングポット論について批判的に言及しており、メルティングポットはかつて存在したことがないとまで断言している。<sup>41</sup>

ボーンの「トランスナショナル・アメリカ」構想とはいかなるものであったのか。また彼は時代を先取りしたこの驚くべき構想をどこから得たのか。ボーンはハーヴァード大学のメノーラ会（メノーラとはユダヤ教のハヌカー祭に用いる 9 本枝の燭台）での講演で、それをユダヤ人のシオニズムから学んだと述べている。<sup>42</sup> これは新しいタイプの国民社会論であり、ここでは様々な出身国ごとの集団が独自のアイデンティティや文化を維持し、一種の「ミニチュア世界連邦」( world-federation in miniature ) を形成するというものである。<sup>43</sup>

ボーンの議論を受け入れるとすると、「アメリカ」とは既存のどの国、どの民族の属性をも意味し得なくなる。真正の「アメリカ」は常に一つ前の「アメリカ」を越えていく「トランスナショナル」な存在となるからである。そこでは多くの国籍を持つ人々が、過去から引き継いだ遺産や祖国との利害関係を継承しつつ、協調して生活しており、同時に、アメリカにおいてはより豊かでコスモポリタンの文化の形成に寄与し、他国に対しては国際親善の模範を提供するわけである。国民社会に対するこうしたビジョンのなかで、「移民は今や生きた力強い文化の系となり、世界にかつて存在したことの無い、新たな国際社会を織りなすため奮闘努力する人々となったのである。」<sup>44</sup> かくして、連邦国家アメリカには文化的な核となるものは存在せず、それは喩えるならば玉ねぎのようなものとなるのである。<sup>45</sup>

ボーンは、ひとりアメリカ人のみが世界市民となる機会を持っていると断言し、コスモポリタンの文化の創造と、異なる民族集団の共生を現実に可能にする手段として「二重国籍論」を展開している。ボーンはいう。「アメリカ市民権を獲得したからと言って、例えば、ドイツの市民権やフランスの市民権を人は放棄しなくてもよい。そもそも、例えば自分にドイツ人の気質が流れていることを発見した人間がアメリカ市民権を獲得することによって以前の自己理解、尊厳の一部を消し去ることはできない。人間の本性の新たな創造は、新しい属性が古い属性の上に降り積もってなされるもののはずである。」<sup>46</sup>

#### 4. 文化的多元主義の問題点と限界

こうして文化的多元主義は、1930 年代から 1950 年代にかけてようやく人々に受け入れられ始めたが、その意味内容は明確なものからは程遠く、多様性を奨励するだけのロマンチックなスローガンにすぎなかった。<sup>47</sup>

ゴードンは社会学者としての立場から、カレンの文化的多元主義の構想を卓越したものとして高く評価する一方で、その分析が概してレトリックや哲学的分析といった枠組みのなかにとどまる傾向があり、厳密な社会学的考察にまで進んでいなかったと批判している。たとえば、「文化的多元主義が理想的に実現された社会では、さまざまなエスニック集団やそれを構成している個人がどのようにコミュニケーションや相互作用を行うのかという点については、カレンの記述ははっきりとした回答を提示していない」というのがゴードンの批判である。<sup>48</sup>

ジョン・ハイナムもまたカレンのロマンチックな楽観主義を鋭く批判している。彼によれば、カレンの哲学は、相違の称揚、既存の不平等への敵意、潜在的調和への暗黙の依拠、のうちに依存している。<sup>49</sup> これらのなかでもとりわけ第 3 の点は重要である。すなわち多元主義者は、生活上の紛争や対立の基底には自然の調和が存在しているという暗黙の楽観的な仮定を抱いている。なぜならば、多元主義者がこの理念をスローガンでよしとして、より緻密な規

範理論の域にまで高めようとしなないのは、彼らが基本的には自然の調和力に依存する楽観主義者だからである。仮に多元主義が暗黙のうちに自然の調和力を期待する楽観主義だとすれば、それは「無意識のうちにそれが拒否しているはずの同化過程に依存している」ことになる。多元主義は、あからさまな「アメリカ化」を唱える同化主義の対立項でありながら、暗黙の楽観主義にたよることによって、分離主義へとその理念が発展していくことを免れていた。<sup>50</sup>

カレンやボーンの文化的多元主義にはひとつの大きな限界があった。文化を異にする移民集団の共存の形態をさまざまに論じた二人ではあったが、それはあくまでもヨーロッパからの移民を念頭に置いた議論にすぎなかったのである。クレヴクールと同様、アメリカ先住民やアフリカ系アメリカ人を具体的に視野に収めた議論をカレンもボーンもついにすることはなかった。ハイアムの指摘にもあるように、「カレンの多元主義の不完全性と偏見とは、それが黒人にどのような役割を振っているかを問われた時に露呈する。『皆無である』というのが、この問に対する答えである。……すべての『アメリカの諸民族』の集団生活について書くと述べておきながら、彼が引いている事例や主張はことごとくヨーロッパからの移民、なかでもユダヤ人の経験にもとづいていた」<sup>51</sup> ののである。カレンがたった一度だけアフリカ系アメリカ人について論じたのは、注意しなければ見逃してしまいそうな脚注のなかでだけであった。<sup>52</sup>

この他にも、カレンがアフリカ系アメリカ人をどのように見ていたかを推測しうる資料がある。カレンの文化的多元主義の思想的起源を探る試みのなかで、ワーナー・ソラズはカレンとその恩師ウェンデルとの長期間に及ぶ膨大な往復書簡を詳細に検討しているが、とりわけわれわれの興味がひかれるのは、ハーヴァードのある優秀な黒人学生（この学生は最優秀な学生に与えられる奨学金「ローズ・スカラー」を受賞している）の扱いを巡っての両者の手紙のやり取りに関する部分であるが、この書簡のなかにわれわれはカレンとウェンデルの黒人に対する人種的偏見が率直に吐露されているのを見ることができる。<sup>53</sup>

ハイアムは文化的多元主義について次のような皮肉な結論を導き出している。「このようにみえてくると、文化的多元主義は、永続的な少数者という自らの地位が有利に働きうることを思い描くに十分なまでに強固な立場をすでに築いている人びとに対して、アピールすると考えてよかろう。それは自分たちをアメリカ史の周辺にではなく中心に置いて見ることが可能な、自信に満ちた少数者集団の代弁者（たとえばカレンのような）にふさわしい。したがって、文化的多元主義は、すでにだいたい同化を済ませてしまった人びとにとって最も魅力的であるということになる。それはそれ自体アメリカのメルティングポットの生み出したものの一つである。」<sup>54</sup>

西洋文明を至上とするこの姿勢は彼らの後に登場した文化的多元主義にも多かれ少なかれ共通する弱点である。1930年代から50年代にかけてもアメリカ社会を多元主義の視点から論じた議論は数多くでている。しかし現在論じられている意味での人種間の差異に着目する議論が行われることは少なかった。人種の違いを包摂する文化的多元主義を論壇が積極的に取り上げるのは、いわゆる「エスニック・リヴァイヴァル」と呼ばれる民族意識の覚醒が起きた60年代に入ってからである。その意味で、90年代を中心に議論されている多文化主義は、それ以前の文化的多元主義とは一線を画すものとして理解されるべきであろう。<sup>55</sup>

<sup>1</sup> 村井忠政著「メルティングポットの誕生—メルティングポット論の系譜(1)—」『人間文化研究』(名古屋市立大学大学院人間文化研究科紀要) Vol. 1, pp. 17 - 30.

<sup>2</sup> Milton M. Gordon, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*, Oxford University Press, 1964, p. 135. ミルトン・ゴードン著 / 倉田和四生・山本剛郎訳『アメリカンライフにおける同化理論の諸相—人種・宗教および出身国の役割—』晃洋書房、2000年、130頁。

- 
- 3 「新移民」(new immigrants)という語は、1909年に設立されたディリングハム委員会(Dillingham Commission)の報告書で用いられるようになった。Michael C. LeMay, *From Open Door to Dutch Door: An Analysis of U.S. Immigration Policy Since 1820*, Praeger Publishers, 1987, p.4.
- 4 ネイティヴィズムについては次の文献を参照されたい。John Higham, *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860-1925*, Rutgers University Press, 1955.
- 5 John Higham, *Send These to Me: Jews and Other Immigrants in Urban America*, Atheneum, 1975, pp. 136-137. ジョン・ハイアム著 / 斎藤眞・阿部斎・古矢旬訳『自由の女神のもとへ 移民とエスニシティ』平凡社、1994年、131-132頁。
- 6 アメリカの多言語社会状況については、次の文献を参考にされたい。ジェイムズ・クロフォード著 / 本名信行訳『移民社会アメリカの言語事情 英語第一主義と二言語主義の闘い』ジャパン・タイムズ、1994年。
- 7 「ドイツの田舎者は、われわれが築いたこの地に群れをなしてやってきただけでなく、固まって生活し、自分の国の言葉や生活習慣を持ち込み、われわれの文化をしのぎそうな勢いだ。そんなことが許されてよいのか。「イギリス人が築いたペンシルヴァニアが、どうしてよそ者たちの植民地にならなくてはならないのか。たちまち人数が増え、われわれが彼らを イギリス化 するどころか、われわれの方が ドイツ化 されてしまうだろう」Jared Sparks, *The Works of Benjamin Franklin, with notes and a life of the author*, Boston, 1828, Vol., VII, pp. 71-73.
- 8 正式名称はアメリカ党(American Party)。秘密結社として1840年代に結成され、メンバーがその組織について「I know nothing」と答えたのがこの俗称の由来。その唯一の政綱は移民、とくにカトリック系アイルランド人の公職からの排除と、帰化のための条件である居住期間の延長であった。1852年選挙後、北部諸州で急激に台頭し、55年には6州の知事選出を果たしたが、奴隷制をめぐる南北対立の激化と共に分裂し、多くは共和党に入った。
- 9 ここでの「ハイフン付きアメリカ人」(hyphenated Americans)とは、一般的に使われている広義の意味ではなく、「移民か、あるいは移民の子もたちで、アメリカと彼らの《母国》が国際紛争において互いに対立する側に立ったとき、アメリカに対する彼らの政治上の忠誠心について疑惑がもたれる人々」のことをいう。あるいはまた、「彼らの《母国》と第三国との紛争に、何らかの組織的なやり方でアメリカをそれに巻き込もうと意図する者たち、また最小限にいて、《母国》との言語上の、そして他の文化的なつながりを維持・強化しようとする人々」を意味する。マーティン・ブロンフェンブレンナー「ハイフン付きアメリカ人 その経済的側面」鈴木重吉・小川晃一編『ハイフン付きアメリカニズム』木鐸社、1981年、109頁。
- 10 John Higham, *op. cit.*, pp.43-44. ジョン・ハイアム著、同上訳書、65頁。
- 11 Michael C. LeMay, *op. cit.*, p.38.
- 12 John Higham, *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860-1925*, Rutgers University Press, 1983, p.65.
- 13 Roger Daniels and Otis L. Graham, *Debating American Immigration, 1882-Present*, Rowman & Littlefield Publishers, 2001, pp. 14-15.
- 14 この問題については、次の論文に詳細な分析がある。野村達朗著「ヨーロッパ系移民の流入と世紀転換期の合衆国人口の構成」佐々木隆他編『100年前のアメリカ』修学社、1995年、19-20頁。
- 15 エドワード・ロス(1866-1961)はカレンと同じくウィスコンシン大学の教授(社会学)であり、ユダヤ民族の人種的劣等性とアングロ・サクソンの優越性を公然と唱える人種差別主義者であった。彼はその著書(Edward A. Ross, *The Old World in the New*, 1914)において、南欧・東欧からの大量の新移民の到来がアメリカの偉大な伝統であるアングロ・サクソンの文化を破壊する危険があるとして、その厳格な制限を主張した。カレンが1915年に『ネイション』誌にその論稿「民主主義対メルティングポット」を発表する直接の契機となったのが、同じ大学の同僚から発せられた露骨な反ユダヤ的移民制限の要求であった。John Higham, *op. cit.*, pp.206-207. ジョン・ハイアム著、前掲訳書、206頁。
- 16 Horace Kallen, "Democracy versus the Melting-pot," *The Nation*, February 18 & 25, 1915.
- 17 Calvin Coolidge, "Inaugural Address," December 6, 1923.
- 18 Michael C. LeMay, *op. cit.*, pp. 74-82.
- 19 *Ibid*, pp. 74-82.
- 20 Horace M. Kallen, "Democracy versus Melting Pot; A Study of American Nationality," *Nation*, Feb. 18 and 25, 1915. この論文は次の論文集に再録されている。Horace M. Kallen, *Culture and Democracy in the United States*, Transaction Publishers, 1998. (Originally published in 1924 by Boni and Liveright.) この著書のあとがき(POSTSCRIPT TO BE READ FIRST)のなかで、カレンは自らの立場を表明するに当たって初めて「文化的多元主義」(Cultural Pluralism)という言葉を用いている。Horace M. Kallen, *op. cit.*, p. 3.

- 
- <sup>21</sup> Milton R. Konvitz, "Horace Meyer Kallen: Philosopher of the Hebraic-American Idea," *American Jewish Yearbook, 1974 - 75*, Jewish Publication Society of America, 1974, p. 56.
- <sup>22</sup> Stephen J. Whitfield, "Introduction to the Transaction Edition," Horace M. Kallen, *op. cit.*, p. xiii.
- <sup>23</sup> Izrael Zangwill, *The Melting-Pot: Drama in Four Acts*, Ayer Company Publishers (Reprint Edition), 1999, p. 33.
- <sup>24</sup> Horace M. Kallen, *op. cit.*, p. 114.
- <sup>25</sup> Erika Sunada, Revisiting Horace M. Kallen's Cultural Pluralism: A Comparative Analysis, p.10. <http://www.info.sophia.ac.jp/amecana/Journal/18-4.htm> スナダは本稿において、同化論者の Mary Antin、メルティングポット論者の Israel Zangwill、文化的多元論者の Horace Kallen という、アメリカの民族的多様性と統一についてそれぞれに異なった見解を主張した3人のユダヤ系知識人をとりあげ、このような見解の相違が生まれるに至った原因を、当時の社会的文脈の中で分析している。
- <sup>26</sup> John Higham, *op. cit.*, p. 205. ジョン・ハイアム著、前掲訳書、204 - 205 頁。カレンにおけるシオニズムとアメリカニズムとの関連についての詳細な分析についてはサラ・シュミットの次の文献を参照。Sarah L. Schmidt, "Horace Kallen and the Americanization of Zionism," Ph.D. diss., University of Maryland, 1973.
- <sup>27</sup> Horace M. Kallen, *op. cit.*, p. v.
- <sup>28</sup> William James, *A Pluralistic Universe*, Harvard University Press, 1977, p. 145.
- <sup>29</sup> John Higham, *op. cit.*, p. 206. ジョン・ハイアム著、前掲訳書、205 頁。
- <sup>30</sup> Stephen J. Whitfield, "Introduction to the Transaction Edition," Horace M. Kallen, *op. cit.*, pp. xii-xiv.
- <sup>31</sup> Horace M. Kallen, *The Structure of Lasting Peace*, Boston, 1918, p. 31.
- <sup>32</sup> Horace M. Kallen, *Culture and Democracy in the United States, op. cit.*, p. 108.
- <sup>33</sup> *Ibid.*, p. 116.
- <sup>34</sup> *Ibid.*, pp. 116-117.
- <sup>35</sup> Randolph Bourne, "Trans-National America," in David Hollinger and Charles Capper, eds., *The American Intellectual Tradition, Volume II, 1865 to the Present*, Oxford University Press, 1989, p.172. ボーンの「トランスナショナル・アメリカ」は『アトランティック・マンスリー』誌に掲載された。 *Atlantic Monthly*, cxviii (July 1916), pp. 86-97.
- <sup>36</sup> Bruce Clayton, *Forgotten Prophet: The Life of Randolph Bourne*, University of Missouri Press, 1984, p.8.
- <sup>37</sup> *Ibid.*, pp.24 27.
- <sup>38</sup> Leslie J. Vaughan, *Randolph Bourne and the Politics of Cultural Radicalism*, University Press of Kansas, 1997, p. 4.
- <sup>39</sup> Carl Resek, "Introduction," in Randolph S. Bourne, *War and the Intellectuals: Collected Essays 1915-1919*, Hackett Publishing Company, Inc., 1964, pp. x-xi.
- <sup>40</sup> Randolph Bourne, "Trans-National America," *op. cit.*, p. 171.
- <sup>41</sup> Philip Gleason, "The Melting Pot: Symbol of Fusion or Confusion," *American Quarterly* 16, 1964, p.39. ボーンはこの論稿を執筆するに当たりカレンの多元主義的思想に触発された。 Werner Sollors, *Beyond Ethnicity: Consent and Descent in American Culture*, Oxford University Press, 1986, p. 97.
- <sup>42</sup> Randolph Bourne, "The Jew and the Trans-National America," *War and the Intellectuals: Collected Essays, 1915-1919, op. cit.*, p. 128. この論文は当初ハーヴァード大学のメノーラ会での講演のために書かれた原稿であり、後に次の雑誌に発表された。 *The Menorah Journal*, (Dec. 1916), pp. 277-284.
- <sup>43</sup> Randolph Bourne, *op. cit.*, p. 177. ボーンのトランスナショナリズム論の解説としては、次の文献が参考になる。 Leslie J. Vaughan, *op. cit.*, pp. 120-141. 本稿の中でとりわけ筆者が興味をひかれたのは、ボーンがトランスナショナリズム論を展開するにあたり、コスモポリタ的な知識人としてのカレンをモデルにしていたとの記述である。
- <sup>44</sup> *Ibid.*, p. 178.
- <sup>45</sup> Leslie J. Vaughan, *op. cit.*, p. 137.
- <sup>46</sup> *Ibid.*, p. 178.
- <sup>47</sup> Philip Gleason, *Speaking of Diversity: Language and Ethnicity in Twentieth-Century America*, The Johns Hopkins University Press, 1992, p. 59.
- <sup>48</sup> Gordon, *op. cit.*, p. 149. ゴードン、前掲訳書、142 頁。
- <sup>49</sup> John Higham, *op. cit.*, p. 201. ジョン・ハイアム著、前掲訳書、199 頁。
- <sup>50</sup> 今田克司著「米国における文化多元主義」(初瀬龍平編著『エスニシティと多文化主義』同文館、1996 年、158 - 159 頁)

- 
- <sup>51</sup> John Higham, *op. cit.*, p.208. ジョン・ハイアム著、前掲訳書、207 頁。
- <sup>52</sup> Horace M. Kallen, *Culture and Democracy in the United States, op. cit.*, p. 218. この脚注の中でカレンは次のように述べ、黒人問題に触れることを意識的に避けている。「私は合衆国の南部やその他の地域の美的素材や文化的特性に黒人のもたらす影響については論じない。この問題は、軽く触れるにはあまりに重大であり、その展開過程においてわからないことが多すぎる。それは別に分析することが必要である。」
- <sup>53</sup> Werner Sollors, "A Critique of Pure Pluralism," Sacvan Bercovitch (ed.), *Reconstructing American Literary History*, Harvard University Press, 1986, pp. 250-279.
- <sup>54</sup> John Higham, *op. cit.*, p.211. ジョン・ハイアム著、前掲訳書、211 頁。
- <sup>55</sup> 文化人類学者の綾部恒雄は、文化的多元論(文化的多元主義)を第1期と第2期に分け、第2期が多文化主義に相当するとの考えを提示している。綾部によれば、第1期の文化的多元論では、論議の対象となったのは専らヨーロッパ系の白人による諸民族集団にすぎなかった。これに対して第2期では、1960年代から80年代にかけて、いわゆる有色人種(カラード)とされている黒人を初めとして、メキシコ系、アジア系のアメリカ人や先住民などのマイノリティ集団が議論の対象に入ってきたことが大きな特色である。綾部はこうした意味で、「文化的多元論の第2期はアメリカにおける共通文化の存在を前提としていた第1期とは異なる個別主義的傾向をみせている。私はこうした第2期における個別主義を多文化主義とよび、前者(文化的多元論)と区別したいと考えている。ただし、アメリカの研究者のあいだでも、文化的多元論と多文化主義とは、必ずしも明瞭に区別された概念とはなっていない」と述べている。綾部恒雄著「民族集団の形成と多文化主義 二つの多文化主義と『るつぼ』化」五十嵐武士編『アメリカの多民族体制 「民族」の創出』東京大学出版会、2000年、37-38頁。